



## ブリュエルの「子供の遊戯」 10

—「ボール遊び」から「穴の中へ」まで—

森 洋 子

### 68 ボール遊び Baispel (図一)

遊具としてのボールはすでに紀元前一四〇〇年のテベの墓廟から発見されているが、人類の歴史とともにこの遊びはポピュラーなものとして愛好された。

ブリュエルの時代、ボールは白い皮ないし布で作られ、牛や馬の毛、おが屑、小砂利が中に詰められた。子供たちはボールがすり切れてしまつて、新しく買つても使えないとき、よく自分でポロ布をまるめて作つたりし

た。

一般的な遊び方は、壁にボールをぶつけ、それがはね返ったとき、また壁にむかつて転がし、返ってくるとき、地面に置かれた相手のボールに当れば得点となる。当らない場合、そのボールが相手のそれに近い位置に来たとき、もちろん相手にとって有利になる。ボールの代わりに、オハジキ、ナッツ、ボタン、柄、小箱、九柱戯用のピン、棍棒を用いることもある。

なおブリュエルの版画「阿呆の祭り」は、一五五一



図1 ブリュエゲル「ボール遊び」(「子供の遊戯」の部分⑧)

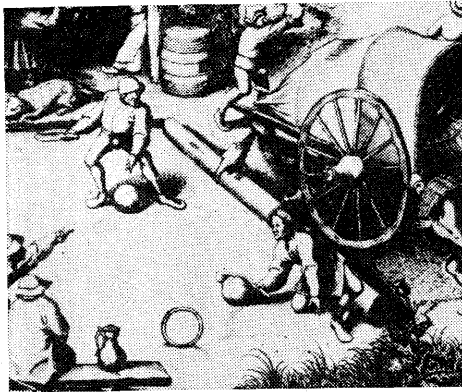


図2 ブリュエゲル「ボール遊び」(「シント・ヨリスの縁日」の部分) 銅版画

年のラントヌヴェール(国内戯曲祭)の道化コンクールから啓発されたものだが、ここでは前景右端の小さな杭に当てようと、大勢の阿呆たちがそれぞれのボールを手集まって来ている。しかしここでのボールは(阿呆のボール)それ自身が「頭」を意味するという、きわめて

寓意的な内容であった。

ほかに同画家の版画「シント・ヨリスの縁日」(図2)で二人の大人がクリケットを使って輪の中にボールを入れようとしているが、この種のより複雑な大人用のボール遊びも当時愛好されていたことは、他の例(図14参照)からも知られる。

十八世紀のオランダの木版画(図3)では、いわゆる「ボール投げ」といってひとりで空中高く投げたり、二人でキャッチボールのようにして遊ぶ様子もみられる。また十六世紀のオランダの版画(図4)には、こう書かれている。「ボール投げをするとき慎重さが要だ」とくにとても上手に

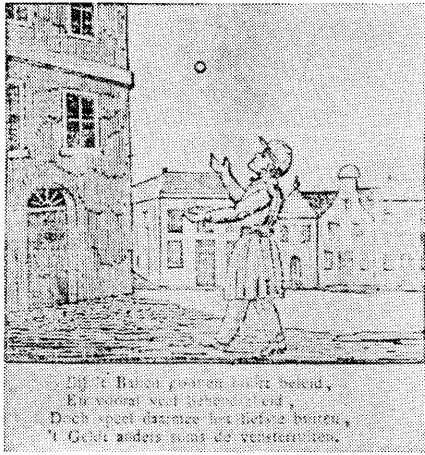


図4 「ボール投げ」(部分) オランダの  
木版画, 19世紀前半



図3 「ボール投げ」(部分) オラン  
ダの木版画, 18世紀

やるべきだ。

一番よいのは外で遊ぶこと

そうでなければ、時折、窓ガラスを

こわすことになる。<sup>注1</sup>

この詩から想起するのは、一六五八年のレイデン市の  
通達で、道路や教会の境内において、ボール転がし、指  
骨遊び、長い鞭をふり廻したり、水泳などの遊びが、禁  
じられたことである。<sup>注2</sup> とくに人の多く集まる教会の境内  
や道路でのボール投げは危険であり、かつ窓ガラスが割  
れる恐れもあったのであろう。しかしブリュージュの画  
面では、子供たちがほんの五十センチ位の近さから壁に  
ボールを当てているので、危険な遊びには属さないだろ  
う。こうして当時は一寸とした空間があれば盛んにボー  
ル投げが行なわれたのである。

69 おっぺい「t Pissertje (図1)

お尻を壁の方にむけて、女の子がしゃがみながらおし  
っこをしている。子供は好奇心の強いものだが、白い帽



図5 「おしっこ」オランダのタイル画、  
18世紀

子をかぶったこの子供は、じっと尿の行先をみているようだ。ヒルズは左横の二人の悪童たちはボールを壁ではなく、女の子の頭をめがけて投げようとしていると推測しているが、はたしてそうであろうか。広場に二百名近い子供が遊んでいるわけだが、用を足している姿を画くことは、一般にブリューゲルの作品としては決して珍しくはなかった。版画「ホボケンの縁日」や油彩画「ネー

デルラントの諺」でも、排尿や排便行為をごく日常的な情景として画面に登場させている。

なおオランダのタイル画にもひじょうにしほしほの情景(図5)がみられる。とくに川などでちょうど仲間が泳いでいるとき、放尿で相手を驚かしているユーモラスな場面も好まれたようである。

## 70 指骨遊び Het Kootspel (図6)

オランダ語 Koot は解剖図的にみると、豚、牛、羊などの動物の指骨(または趾骨)のうち、基節骨(古くは第一指骨とよばれた)Phalanx proximalis (図7、8)にあたる。筆者は豚や羊の基節骨などを実際に手にしたが、上部は図8のように、その上の骨(中手骨)との鋭い接合面のある関節面、そして下部は滑車面のある丸い二つの関節頭があった。関節面を下にすると、なかなか安定した立ち具合なのに驚く。骨の長さは豚の場合4センチ位(牛は6.5センチ前後)で、20グラムの重さである。<sup>注4</sup>さてネーデルラントでは古くから大人たちの間で、こ



図6 ブリュエール「指骨遊び」(「子供の遊戯」の部分⑩)

う。両遊具ともすでにギリシャ、ローマ時代から知られていた。画面をみると三人の男の子たちが腕を振り上げながら、手にした骨を壁の前に横に一直に並べた六個の骨をめがけて投げようとしている。すでに一個が倒れており、女の子が直そうと身をかがめてい

の骨は賭事に用いられたらしい。子供たちの間では、骨投げとか、今日でいう一種のボーリングに似た遊戯に愛用された。骨を遊具とする例として、他に1の「お手玉遊び」(本誌昭和五十六年九月号参照)があった。この場合も動物の後趾の距骨が遊具として利用されている。子供たちはこれらの骨を屠殺時にはよく収集したのである

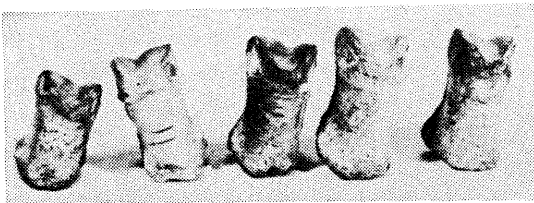


図8 基節骨 (図7と同じ出典 afb. 387 より)

る。さらに別の一個は前方に転がり始めている。ところで子供たちは丸味のある関節頭が上になったとき、「ストーフ」(Stoof = Stomp 鋭利ではない、鈍い)の意)とか「ケウス」(Kuis きれいの意)と名づけ、時にはその上に十文字の印をつけた。また窪みのある関節面が上の時は「シャイト」(Schift ウンコ)といった。

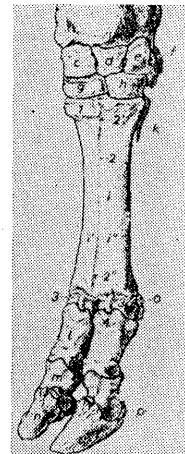


図7 牛の前足の骨格、  
lが基節骨

J. Pluis, *Kinderspelen op tegels*, afb. 386より

遊び方は古来、種々知られているが（といっても十九世紀末には消滅した）、そのひとつは、骨を投げたとき、ストーフが上になるかどうかというもの。十九世紀の「子供版画」に、「骨がストーフになったら、君は十文字の印をみるぞ、そしたらこの遊びは勝ったと知りたまえ」と銘記されている。そのため、子供たちは種々の作戦を考え、関節面に穴をあけ、鉛を詰めて土台を重く、安定する工夫をしたこともあった。

このほか、壁に並べた骨にむかって自分の骨を投げ、倒れた骨の数だけ、自分のものとなるという遊び方もある。画面の少年も左手に骨入れ袋をもっている。ハルトマン・レンスによるとストーフにするかシャイトにするかは仲間同志であらかじめ賭をするという。しかし、筆者が実験したかぎりでは、ストーフになることはあっても、シャイトの状態で立つということは、平な床ではほとんど不可能で、せいぜい柔らかな砂地か、でこぼこの地面で偶然、支えを得て可能のように見えた。ゆえにハルトマン・レンスのいうように「シャイト」に賭けるこ

とはありうるのかどうか疑問である。

J・A・カロムは一六二六年、アムステルダムで発行した匿名作者の『子供の書、子供の遊戯の寓意』の中でこの骨遊びをこう語っている。

「(指骨が) 重くて、中側の厚いものならば大抵は勝ちとなる。

しっかり止まり、(下が) 四角だとすれば

仲良しを金持にする。

早く、軽く滑ってしまうのは

自分の側に倒れ

右か左か背中側に倒れ

われらの若者は

早く勝負がつきすぎる、<sup>注6</sup>と思うのだ。」

指骨の関節面は鋭利な凹凸面で、しかもかなり固く重いものだから、もし顔に当たったら目がつぶれるほどの大怪我をする。しかも時には骨の代わりに石が利用されることもあった。ゆえにもし投げそこねて窓ガラスに当たったら危険である。そのため、68のボール投げで記述した



図9 E. シリマン「指骨遊び」(部分)(J. カッツ「結婚について」1642年より)銅版画

家の内庭で、ボール、骨、石投げ遊びを禁じる、それに違反したときには子供の両親が五ストイヴェルスの罰金を支払う、という通達を出した場合もある。<sup>注7</sup>

骨遊びが画かれたもとも古い例のひとつは、十六世紀初期のフランドルの時禱書(ロンドン、大英博物館、通称『ホルフの書』Add. MS 24098, fol. 27v)の十月の



SPLEEN MET KOETLEN  
図10 「指骨遊び」(部分)オランダの木版画, 18世紀

ように、一五五七年ハールレム市で、二、三の教会の境内や街中の

ミニアチュールであろう。そこでは全頁大に、新たに樽詰された葡萄酒の取引風景が画かれ、その欄外にこの骨遊びをする子供の姿が画かれている。そのほかこの遊戯はカッツの『結婚について』の挿画の一部分(図9)、十八世紀の木版画(図10)やタイル画などに豊富に画かれている。ただし骨遊びは男の子が主体だったらしく、図11のように「指骨は男の子にとつての快い楽しみだが、女の子のものではない」と記され、女の子が仲間はずれにされているところが面白い。



図11 「指骨遊び」(部分)オランダの木版画, 19世紀前期

十七世紀になると、この骨遊びに教訓的意味を与えた詩人がいる。道徳詩人のヤコブ・カツの「骨遊び」の寓意詩を紹介しよう。

「骨遊びはそれをよく知る者にとっては面白い  
牛が家畜小屋に行くかぎり

骨はまだ道路での遊びにならない。

しかしこの動物が小屋から出され悲しげに倒れるとき

そうすればすぐに、その脚は

道路での子供たちのものになる。

彼らは大騒ぎをし骨や膀胱で遊ぶ。

吝嗇家は自分の財産を守る

誰もの利益にならないように。

彼は自分の懐にそれをしっかりとしまふ。

死の苦しみの時まで。

しかし彼が死ぬや否

遺産を相続した人間は

それを喜んで明るみに出す

これまで太陽も月も見なかったそれを。

この吝嗇家が地面に埋めたもの

それはやがて怠かな快楽のためのものになる。<sup>注8</sup>

ここで、ブリュッゲルの画面には画かれてないが、す

でに当時、盛んに好まれた類似のゲーム、九柱戯につい

て触れてみたい。すでに十五世紀末、フランス・ヴァン

・ブリュッゲの銅版画「農民の喧嘩」(図12)では、九柱

戯のゲーム最中のいざこざが表わされている。同じくド

イツの木・銅版画家でニュールンベルグで活躍したハン



図12 フランス・ヴァン・ブリュッゲ  
「農民の喧嘩」銅版画、15世紀末



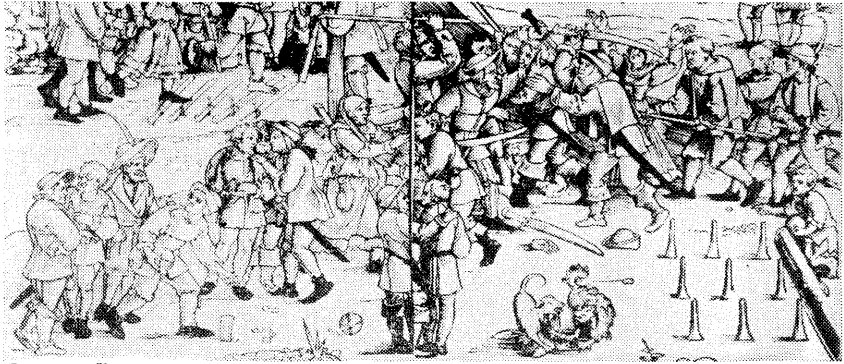


図13 バルテル・ペーハム「九柱戯」(「村の縁日」の部分) 1534年頃, 木版画

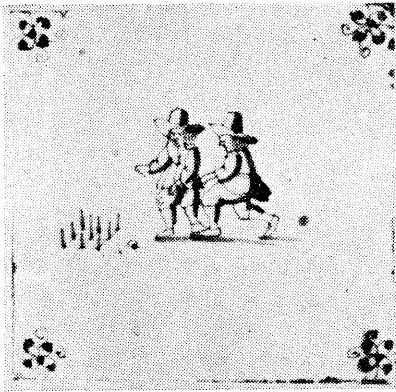


図15 「九柱戯」オランダのタイル画  
17世紀後半

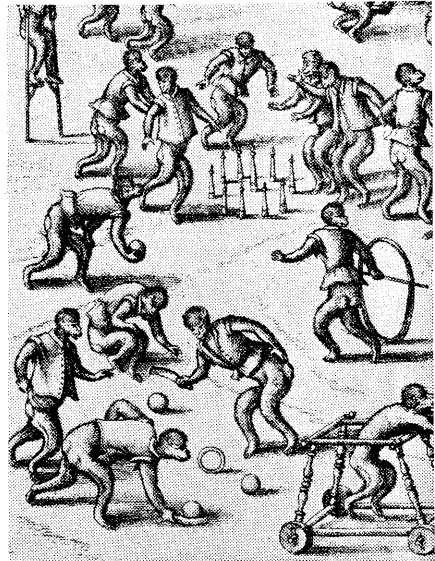


図14' ビーテル・ヴァン・デル・ポルフト「九柱戯とボール遊び」(「猿の遊戯」の部分) 銅版画, 1580年頃

ス・ゼーバルト・ペーハムの「村の縁日」(図13)でも、祭日での種々の娯楽(ダンス、刃渡り、駆足)の中に、この遊戯が前景のかなり大きなスペースを割いて画かれている。細長い円錐形のピンを三本ずつ三列に、すなわち計九本立てて、遠くからボールを転がし、ピンを倒すという、今日のボーリングの前身のよ

うなものである。真中のピンを王様と呼び、これを倒すと一番得点になる。なお、一五八〇年頃に制作されたピ―テル・ヴァン・デル・ボルフトの「猿の遊戯」(図14)ではこの九本のピンを円形に並べ、真中に王様のピンを置いてある。この版画は直接、ブリューゲルの「子供の遊戯」に啓蒙されたといわれるが、ボルフトは同一画面に、「骨遊び」をも画いているので、ブリューゲルがなぜ九柱戯を彼の九十近い遊戯の中に入れなかったのか、不明である。なお十七世紀のオランダのタイル画(図15)にも好んでこの遊戯は用いられた。F・M・ペーメは九柱戯 Kegelpiel がドイツの起源と推定し、中古ドイツ語の *chezil* (すなわち "Prähl" 抗) に溯源すると述べている。<sup>9</sup> 実際、一二九〇年頃に書かれたリューディガー・デル・フントホーヴェルの「棍棒」という詩にはこうある。

「誰でも

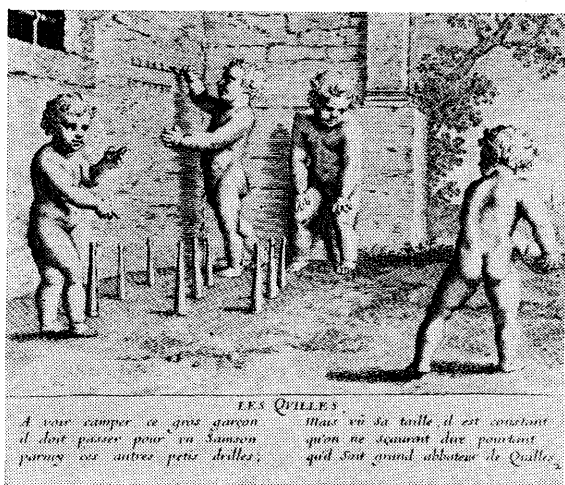
九柱戯をしたい者は

広場に行くべきだ

そこで彼は沢山の計略を見つけるだろう。<sup>10</sup>

この詩の中で「計略」 *Vür saz=Vorsatz* と述べているのは、前の詩で、親を顧りみない子供たちに対する「計略」と関係させているのだろう。

十七世紀のフランドルの詩人ジャック・ステラは、九柱戯についての詩を残している(図16)。



LES QUILLES.  
*A voir camper ce gros garçon  
 il doit passer pour un Samson  
 parmy ces autres petit drolles.*     
 Mais vu sa taille il est couchant  
 qu'on ne sçaurait dire pouissant  
 qu'il soit grand abbateu de Quilles.

図16 クローディン・ブゾネ・ステラ「九柱戯」(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より) 銅版画

「この肥った少年が

身構えているのをみると

彼は他の小さな奴らの間では

サムソンとみなされている。

だが背は高くとも

彼が九柱戯のピンの

大打倒者となるかどうか

確かに誰も云えないことだ。<sup>注11</sup>」

## 71 ハンドル投げ Het Klinkerspel (図17)

二人の少年がそれぞれ片手に軽い一本の木の棒をもっている。右側の少年がまず棒（それをハンドル Klink, Klinkerd と呼称）を空中に高く投げると、棒の先端をもった左側の少年が、仲間の棒が落ちてくるのを待ってたたき、もう一度棒を空高く飛ばす。

しかしよく見ると、左側の少年は自分の前の穴を守っているようでもある。ゆえにハルトマンIIレンスは、ま

ず右側の子供が棒をその穴に入れるべく投げるのを、左



図17 ブリュージュル「ハンドル投げ」(「子供の遊戯」の部分⑩)

る。

ドローストは古いオランダの遊戯に注目しているが、それによると、まず小さな穴の中に両端の尖った十センチから十五センチ位の棒を入れる。その上に短い棒をのせ、下から勢いをつけ、上の棒を空中高くはじき飛ば

側の子供がそれを阻止している、と解釈している。<sup>注12</sup>もし棒が穴から離れたとき、穴からの距離を計り、棒の長さ分を一点と計算し、一方が百点となったら、ゲームは終りとなる。

す。それを仲間が掴まねばならない。成功すると、掴んだ場所から再び、長い棒のある穴の中に投げ入れなければならぬ。もし掴みそこねて、棒が地面に落ちてしまったとき、その位置から穴に投げ入れることになる。

確かにこうした遊びはあったであろうが、このブリュッゲルの画面では二本の大小の棒が入るほどの大きな穴ではないので、ドローストの説明はここでは該当しないように思われる。ただし、ラブレールの『ガルガンチュア物語』の第二十二章「ガルガンチュアの遊戯」には、「穴入れ」à la truye とか「棒のせ」à la vergette、「棒とばし」à la pyrouete など、このブリュッゲルの画面に関連する遊戯が列挙されている。

## 72 穴の中へ Naar de Putten (図18)

七人の少年たちが縦に一列にあげられた小さな穴を取り囲んでいる。前かがみの一人の少年が左手にボールをもち、穴の中に入れようとしている。ド・マイヤーはこの少年が仲間が邪魔される前に見事にボールを入れたら

得点となる、述べているが、<sup>注14</sup> どう邪魔するか説明してない。

ハルトマン・II レンス<sup>注15</sup>によると、どの子供も自分の穴というものを持っている。まずくじで番になった子供が一定の距離からボールを穴の中に転がすか、投げ入れる。三回やって失敗したら他の子供と交代する。穴に入れることができたなら、すぐボールを拾い、他の子供たちにそれをぶつける。子供はすぐ逃げ出さねばならないが、もし体に当てられたら、自分の穴に小石を入れねばならない。投げ手が逆に失敗したら、自分の穴に石を入れることになる。こうして遊び仲間たちは、ある一定の石が穴にたまってしまったら、その遊びは終りとなる。しかし一番の負者は、38の「足蹴りごっこ」と同じ罰である *door de spitsroeden loopen* (二列に並び、鞭をもった仲間の間を走り抜けなければならない。本誌一九八二年五月号参照) を受ける。

この遊戯の歴史はかなり古く、すでに十三世紀後半に活躍したドイツの教訓詩人ヒューゴー・フォン・トリン



図18 ブリュージュル「穴の中へ」(「子供の遊戯」の部分②)

ベルクの『競争者』(一三〇〇年)の

中に、「子供たちが道路に小さな穴

をあけたように、ここに一列にならんでいる」とこの遊

戯らしきもの言及がある。<sup>注16</sup>

注17  
コック・テリリンクはこの遊戯を *Puttekenballen*

(小さな穴の小さなボール)と、ドローストは *Petjeball*

(「ボールの小さな穴」の意味)とか *Negenputten* (九つ

の穴)など、それぞれ、オランダの古い表現を見出して



図19 E. シリマン「穴の中へ」(部分) (J. カッツ「結婚について」1642年より)

いる。とくに「九つの穴」の場合、それぞれ一定の価値をもつが、とくに真中のそれは前述したように、一番重要度が高いのである。さらにドローストはイギリスで *Nineholes* と呼称される遊戯の歴史を紹介した。これは一七八〇年頃に復活したゲームだが、というのも市参議会がロンドン市の内外での九柱戯用のグラウンドや柵を取り壊したからで、その代替用の遊戯として見直されてきたのである。そのため、人々はこの処置に立腹し、この六ボール遊びを、*Bubble the Justice* (泡沫正義)と仇名したのである。

このほか、ドイツでは穴ではなく地面に帽子を置いてその中にボールを入れる遊び *Mützenball* とか *Kappenball* もあるが、カロム(一六二六年)もその中で、

*Ter Kuyt-spel* (穴遊び) *Balleken in de hoed* (帽子

の中へ小さなボールを)と言及している。<sup>注19</sup> ヤコブ・カッツ

の『寓意と愛の図像集』(一六二二年)のタイトル・ペー

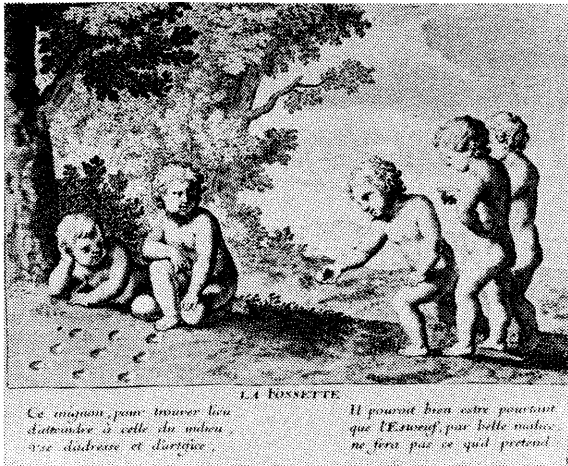


図20 クローディン・ブゾネ・ステラ「九つの穴」  
(図16と同じ)

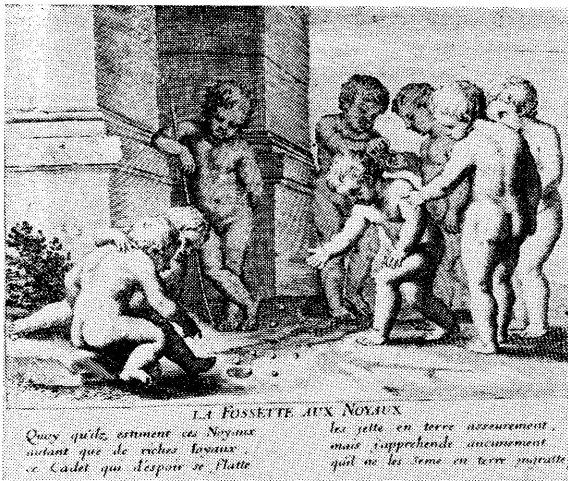


図21 クローディン・ブゾネ・ステラ「種の穴」  
(図16と同じ)

ジにも道路で遊んでいる二人の男の子と、それをみている小さな女の子と犬という微笑しい挿画(図19)がある。クローディン・ブゾネ・ステラは樹木の繁る郊外の平地の一角で、五人の子供たちがボール遊びに夢中になっている姿を画いている(図20)。これから投げようとする

子供の真剣な眼差し、後ろで立って彼に指図をする仲間、さらに地面に坐って彼の仕草を見守る二人の子供たちなど。ジャック・ステラの詩「九つの穴」は以下の如くである。

「この可愛い童子は

真中の穴に届く場所を見つけるために  
気転と技巧を使う。

けれども布ボールは意地悪く

あの子が思った通りに入らないことも

きつとあるだろう。」<sup>注20</sup>

他方、ステラは同一の詩集で、手の平に入るほどの大きなボールではなく、小石とか果実の種子などを穴に入れるという類似の遊戯も、「種の穴」と題して謳っている(図21)。

「彼らはなんとこんな種を

高貴な宝石と思っているが

希望に燃えたこの若者は

自信をもって得意気に地面に種を投げる。

しかし、不毛な土地での種蒔きは駄目だ。

私は云いたいのだが。」<sup>注21</sup>

注1 Jan Puijs, *Kinderspelen op tegels*, Assen 1979, p. 92.

注2 *Ibid.*, p. 17.

注3 Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspiele 1560*, Wien 1957, p. 41.

注4 本稿の図7、8は Puijs, *op. cit.*, p. 174. による。なお

獸類の骨については明治大学農学部教授友田 仁教授に豚、羊、キリン、ヒラコなどの基節骨の実例をみせていただいた。この教示を得た。

注5 J. Wendel, Amsterdam (1801-1849) 発行の「子供版画」二十番からの銘文。

注6 *Kinderspeck ofte Simmspecken van de spelen der kinderen*, 発行者 J. A. Calom, Amsterdam 1626.

注7 F. Hartmann en E. Lens, *Héél Job!* Amsterdam 1976, p. 84-85.

注8 Jacob Cats, *Kinder-spiel*, Sint-Omer 1855, pp. 56-61 (reprint).

注9 F. M. Böhm, *Deutsches Kinderlied und Kinderspiel*, Leiden 1897 の書及 Hills, *op. cit.*, p. 45 にある。

注10 Rüdiger der Hünthover, *Der Schläger* (ca. 1290), 発行者 F. V. d. Hagen, *Gesamtdruck*, II, 49, 1184 以下。

注11 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint; *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 24.

注12 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 80.

注13 W. P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel vóór de Zeventiende Eeuw* (Dissertation), Leiden 1914, p. 91.

注14 Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verklaard*, Antwerpen 1941, p. 9.

注15 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 81.

注16 Hugo von Trimberg, *Renner* (1300), 発行者 G. Ehrisman, II, Z. 11, pp. 425 ff.

注17 A. De Cock en Is Teirlinck, *Kinderspelen en Kinderlied in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. III, pp. 116-126.

注18 Drost, *op. cit.*, p. 61 ff.

注19 Cock en Teirlinck, *op. cit.*, Bd. III, p. 125.

注20 Stella, *op. cit.*, NO. 14.

注21 *Ibid.*, NO. 16.

(東京工芸大学)